

伊勢・熊野の信仰と和歌

研究の概要

本研究の概要は、中世の伊勢や熊野の神仏習合が中世和歌の本質に与えた影響を解明するため、中世和歌の源流をなす西行と慈円という歌僧の和歌について悉皆的な調査を行うというものである。中世和歌はその本質において、近代的な自己とは相反する没個性的な類型性を有する。宗教信仰も、個々人のばらばらな思いを一つの共同性のうちに包摂するが、中世和歌もまたそれに類する「本の思想」なるものを持つ。それが本歌取りや、本意（もとの心）、歌の本体（＝『古今集』）、本地といった概念である。中世の国土観における伊勢や熊野は、超越的存在としての神仏が垂迹する「本」（もと）の地であったのではないか、という見通しのもと、歌道仏道一如観の研究を日本中世史、仏教学、地理学とも連携しつつ行ってゆく。



連携アピール



私の専門とする中世和歌において、和歌と仏教がタイアップして、「歌道」が作り上げられてゆく中で、伊勢や熊野は聖地となりました。平安時代から和歌は「百首歌」という形式で神仏へ祈願を届ける手段となっていました。その中で中世和歌は祈りの言葉として完成され、さらに熟成を重ねていきます。その熟成の過程において慈円は大きな役割を果たしています。伊勢や熊野へのはるかな道程の苦しさを乗り越え、自然の風景に心を澄ます修行は西行和歌の本質をなし、芭蕉の『奥の細道』にも繋がっていったのです。

キーワード



- 地域観光
- 日本中世文学
- 仏教学

研究者



木村 尚志

Takashi Kimura

教授 博士（文学）

文学部 国文学科

